

# ジェネラリスト・漢方

## とっておきの漢方活用術

漢方は現代医療のなかで、内科疾患だけでなく、消化器外科、婦人科、脳神経外科、泌尿器科、心療内科などあらゆる領域で活用されている。特に総合診療、プライマリ・ケアの現場では、内科に限らずさまざまな症状をもつ患者、診断がつかない愁訴をもつ患者、標準的治療に難渋する患者などにしばしば遭遇するが、そういった場合に漢方治療を知っていると異なる視点からのアプローチが可能になる。

また漢方治療といえば、慢性疾患に対する外来治療で、「長く飲まないと効かない」というイメージをもたれがちだが、漢方医学のバイブルである「傷寒論」は、1800年程前の後漢末期に当時流行した急性熱性疾患に対応するために編集された書物である。つまり、漢方は急性疾患に対して用いられ発展した歴史をもち、かぜやインフルエンザはもちろん、それ以外の急性疾患に対しても外来、病棟を問わずに活用できる治療であるといえる。

これを実感していただくため、本特集では、循環器内科、救急外来、急性期病棟など漢方とは一見なじみの薄いと思われる分野も含め、各領域の専門医と漢方専門医をもたれている、いわゆるダブルボードの先生方に、その治療法をご解説いただいた。まず「領域別おすすめ漢方治療」では、エビデンスを踏まえながら各領域でよく使用される漢方薬の使い方と、次の一手を紹介していただいた。次のステップとして「エキスパートに聞く！漢方治療の極意」では、各領域で漢方治療を活用されているわが国のトップランナーともいえるエキスパートの先生方に、エビデンスに限定せず、そして単なる薬物療法にとどまらない漢方治療の極意をご紹介いただいた。現代医学的な治療と漢方治療のそれぞれのメリットや限界を踏まえながら、各領域における漢方治療の活用法をご解説いただき、私自身も本特集の編集を通して専門医の先生方の考え方や実際の診療に触れ、非常に勉強になった。なお、付録として漢方薬の索引(pp 1273~1277)を設けたので、特定の漢方薬から各領域への活用を知りたい場合に利用して欲しい。個人的には、この索引を眺めると、漢方治療の特徴である、異なる疾患に対して同じ漢方薬で治療する「異病同治」が現れているようでワクワクとした気持ちになる。

漢方薬の副作用は、漢方治療の普及に伴い危惧される問題の1つであり、漢方薬を用いづらいう理由としてもしばしば挙げられる。また、一般の方には漢方には副作用がないと誤解されていることもある。漢方薬の副作用は、それに含まれる特定の生薬に着目する必要がある。本特集では日常診療で問題となることが多い偽アルドステロン症（甘草<sup>かんぞう</sup>）、肝障害・間質性肺炎（黄芩<sup>おうこん</sup>）に加え、近年明らかになってきた腸間膜静脈硬化症（山梔子<sup>さんしし</sup>）、また複数の医療機関で漢方薬が同時に処方されている漢方薬のポリファーマシーの問題について、精通されている漢方専門医の先生方にご解説いただいた。漢方薬の副作用についての注意点と現時点で解明されている知識が学べる内容である。なお、「領域別おすすめ漢方治療」では、取り上げられた主な漢方薬について、上記に加え、副作用に注意すべき生薬である大黃（下痢<sup>だいりゅう</sup>）、麻黄（胃腸障害、不眠、動悸など）、地黄（胃腸障害）、附子（トリカブト中毒；口のしびれ、動悸など）の含有の有無をまとめた表を各項目に掲載しているので、併せてご覧いただきたい。

本特集の冒頭には「なぜ漢方？と漢方のナゼ」として、私自身が漢方を専門とするようになった経緯や、漢方が役立つか、漢方治療のよい適応について書かせていただいた。また、勉強会などで質問されることが多い漢方の疑問をQ & A形式で掲載した。本特集の前座として、漢方治療への理解や漢方を勉強するきっかけやモチベーションの一助となれば光栄である。

本特集でも取り上げたように、漢方治療を上手に活用できれば、不安、抑うつ、不眠といったメンタルヘルス不調に対する治療も可能になり、全人的治療にもつながる。本特集により、読者の先生方が、あたかも鑑別診断の1つのように「これは漢方の出番でしょ!!」と想起できるようになり、適切な漢方治療が漢方を必要としている患者さんに行き届くことで、わが国の内科・総合診療の発展に貢献できれば幸甚である。また本特集全体を通じ、漢方薬を正しくおそれて上手に活用していただけるような、漢方治療の普及を願っている。

吉永 亮（飯塚病院東洋医学センター漢方診療科）

※本特集に記載されている漢方薬名および漢方薬の番号はツムラ社製の漢方薬名および製品番号に準じた。またツムラ社にない漢方エキス製剤については製造メーカーと製品番号を別途記載した。